

こころ



THCU Chronicle *Heart* No.21 Spring 2016

第21号



開学10周年記念祝賀会を開催しました

本学が開学して10周年を記念して、平成27年12月3日(木)夕刻、東京・千代田区内のホテルにおいて記念祝賀会を開催しました。
当日は、師走の慌ただしい時期にもかかわらず、ご来賓の皆様をはじめ学内外から700人を超える大勢の方々にご参加をいただき、盛会裏の内に終了することができました。
関係者一同は次の10年の歩みの第一歩を踏み出す場面に立ち会えたことで、今後更なる飛躍を決意しました。(詳しくは2ページをご覧ください。)



- 2 開学10周年記念祝賀会について (詳報)
開学10周年誌の発刊について
- 3 第11回 医愛祭が開催されました
同窓会から野外テントを寄贈いただきました
- 4 早期入学確定者に対する看護学科の入学前授業体験会の報告
基礎看護援助実習Ⅰを終えて
医療保健学部 看護学科
- 5 平成27年度 医療栄養学科卒業研究発表会
医療保健学部 医療栄養学科
- 6 平成27年度 医療情報ゼミ発表会
医療保健学部 医療情報学科
- 7 立川キャンパスの紹介
国家試験に向けて頑張っています!!
東が丘・立川看護学部 看護学科
- 8 院生の声
大学院 医療保健学研究科
- 9 「改正・保健師助産師看護師法」に基づく特定行為研修がスタート
原発事故後の福島を見学して
大学院 看護学研究科
- 10 平成28年度 オープンキャンパス等日程
- 11 国際交流
- 12 Topics

開学10周年記念祝賀会について（詳報）

前述したとおり、平成27年12月3日(木)午後6時30分から記念祝賀会を開催しました。当日は午後の早い時間帯まで雨模様の天候でしたが、時間の経過とともに晴れ間が見えるようになりました。準備に当たった学内関係者にとっては、何よりの天からの恵みでした。

午後6時30分の開会の前には、続々と参会者がお集まりになり、受付の付近はかなりの混雑が見られました。会場の大広間は1,000㎡を超える広さがありましたが、参会者が入場しますと、さしもの会場も余り広さを感じなくなるという感覚でした。

開会の15分ほど前には、会場の左右に設置された大スクリーンに大学の10年の歩みに因んで制作したスライドが上映されました。ご覧いただいた方々からはご好評をいただいたようです。その直後には、開会の挨拶を予定している田村理事長が挨拶の中で本学の校歌の一節に触れることから、参会者の方々に事前に校歌をお聴きいただくという趣旨で、校歌のCDを場内に流させていただき、その上で開会するという運びとしました。

田村理事長の挨拶に続き、文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当）の義本博司様、独立行政法人 国立病院機構 名誉理事長 矢崎義雄様、NTT東日本関東病院 院長 亀山周二様のお三方か

らご祝辞を頂戴したところで、当日の趣向として鏡開きを行いました。広い壇上の横一列に9つの日本酒樽を配置し、1樽につき5名程度、計50人近くの方々にご参加いただいて、司会者の掛け声とともに一斉に木槌が振り下ろされました。

鏡開き後は乾杯に移りましたが、乾杯のご発声は森 喜朗元内閣総理大臣（現東京オリンピック・パラリンピック組織委員会委員長）にお願いしたところ快くお引き受けいただき、おなじみのユーモアとウィットに富んだスピーチの後に乾杯となりました。森先生には、10年前の開学の記念式典にもご出席いただき、ご挨拶を頂戴したというご縁があります。

その後、本学を代表して木村現学長及び小林前学長（現名誉学長）から、日頃の本学に対するご支援などに関して深く感謝するとともに今後も変わらぬご支援、ご指導をお願いしたい旨の挨拶がありました。以上で開会のセレモニーが一応終了したところで自由にご歓談いただくこととなり、和やかな雰囲気の中で酒こうをともにしながら、予定された時間まで瞬く間に時が流れました。

終了の時刻には、本学の田村副理事からご参会の皆様に向けて謝辞及び今後の決意が披露されるなど、当日の祝賀会は滞りなく終了を迎えました。

開学10周年誌の発刊について

開学10周年の記念事業の一環として、開学10周年誌を発刊しました。今回は、紙媒体の本の仕様ではなく、手軽に持ち運びのできるCD-ROMを媒体とした電子ブック仕様としました。

今後、本学のアーカイブ資料としての基になるものと言え、有効に活用されるよう期待したいと思います。

■主な内容

- 学内外の方々からの10周年に向けた寄稿文
- 特別座談会① 「東京医療保健大学の第二章を迎えて」
- 同 ② 「特色ある看護教育の今後の展開」
- 本学協力企業について

- 活躍する卒業生・修了生
- 大学現況紹介
- 資料①、②
- 10年の歩み など

この電子ブックは、紙媒体に換算するとA4判の大きさと70ページに相当します。また、画面の表示を拡大する機能、全文を検索できる機能が付加されています。なお、市販等はしておりませんので、ご覧になりたい方は本学の付属図書館などにお問い合わせください。



第11回医愛祭が開催されました。

平成27年11月7日(土)、8日(日)第11回医愛祭が世田谷キャンパスで開催されました。今年度のテーマは「船出」。船が大きな海に出るように、本学の学生が挑戦していこうという意味と、第1回医愛祭のテーマ「俺たちの船出」から10年が経過した区切りの年を迎え、再び船出というテーマで原点に戻る気持ちで活動しようという意味を込めてこのテーマを決定しました。残念ながら医愛祭両日ともに天候に恵まれず悲しい思いをすることもりましたが「船が大きな海に出るように私たちも挑戦していく」という気持ちで大学祭実行委員会の学生をはじめ参加学生の一人ひとりの熱い思いによる挑戦と努力により、大学祭を無事成功に導くことができました。近隣の皆さまを含め2日間で1,242人にご来場いただきました。



写真左側は、医愛祭実行委員長の長谷衣純さん（東が丘・立川看護学部2年次生）、右側は、学友会長の笠原麻央さん（東が丘・立川看護学部3年次生）です。

同窓会から野外テントを寄贈いただきました。

大学開学10周年の記念品として、東京医療保健大学同窓会から屋外テント2張りを寄贈いただき、平成28年2月26日に小口未来（旧姓：遠山未来）同窓会副会長から木村哲学長に目録が贈呈されました。今後、医愛祭を初めとした大学行事や学友会で有効利用してまいります。なお、東京医療保健大学同窓会は本年3月の卒業生を含め会員数2,583人の同窓会に成長しております。



訃報

上野尚一本学園理事・評議員がご逝去

平成28年2月29日(月)午後0時18分頃、^{うののしょういち}上野尚一本学園理事・評議員（朝日新聞社社員）は病氣療養中のところ、新宿区内の病院においてご逝去されました。享年79歳でした。

故上野理事・評議員におかれましては、平成10年から学校法人渋谷教育学園理事に就任され、平成15年からは学校法人青葉学園の理事・評議員もお務めいただいております。東京医療保健大学の開学及び発展等に大変ご尽力をいただきました。

ここに慎んで哀悼の意を表します。

早期入学確定者に対する看護学科の入学前授業体験会の報告

医療保健学部看護学科では、AO入試と公募推薦入学試験等により早期に入学が確定した高校生に対して、平成27年12月25日(金)13時～16時に授業体験会を実施した。これは、大学が実施している入学前教育の開始時期より早い11月より、看護学科が独自に企画している入学前教育の1つであり、より効果的な企画となるよう検討を続けている。今年度は28名が参加した。授業体験会の内容は、講義への参加、ノートの取り方やレポート作成に関するミニレクチャー、在学生との交流、アカデミックスキルや看護に関する図書紹介である。



授業体験会の様子

参加者は、高校までの授業との違いやノートの取り方に関するミニレクチャーを受けてから、「体の仕組みと働きⅡ」の講義に40分程度参加した。講義参加後の振り返りでは、教員の話聞きながらノートをとること、講義のスピードについていくこと、重要なポイントを判断することの難しさを実感した一方で、大学で学習する専門的な内容に関心をもち、1つ1つの講義を大切に聴くこと、自ら学ぶ必要性を実感していた。

在学生との交流では、早期入学確定者であった2年次生が、大学と高校での学習の違いや、入学までに学習を継続しておくことの大切さを伝えた。また、入学後のグループワーク、患者の体験記を読んだことで看護への関心が高まったなど具体的な学習体験を語った。参加者は和やかな雰囲気の中で、在学生に対し大学生活に関する具体的な質問をしており、在学生やこれから共に学ぶ同級生との交流を深める機会となっていた。

参加者のレポートからは、授業体験会が入学後の学習や大学生活への期待を高め、入学までの準備として学習を継続することへの動機づけの機会となったことが伺えた。今年度は新たに、大学での学習や看護職への関心を高めることを目的に、アカデミックスキルや看護に関連する本を紹介し、冊子にして配布した。今後も引き続き企画内容を評価し、早期入学確定者への効果的な入学前教育を検討していきたいと考える。

入試広報委員会委員 講師 やまざき ちづこ 山崎 千寿子

基礎看護援助実習Ⅰを終えて

医療保健学部看護学科1年次の臨地実習が、本年度より新しくなりました。ねらいは、学生が早期に臨地で実習することにより学修へのモチベーションを高く維持すること、臨地実習の学びと授業の学びが往還型で繰り返されることにより学生の主体的な学習を促進することです。

実習施設はNTT東日本関東病院、東京通信病院、日産厚生会玉川病院でした。学生は11月～12月に臨地実習3日間と学内実習2日間を学修しました。臨地実習では看護師が実施するケアに参加し、その体験から自分の課題を明らかにして学内実習に取り組み、それを次の臨地実習で実践しました。2回目の臨地実習ではさらに次の課題を見つけ、また学内実習で取り組み、3回目の臨地実習に行く……というように、臨地と大学での学びを往還させながら実習を重ねました。臨地実習最終日に多くの学生は、患者さんの血圧等を測定することができ、体を拭く・シャワー浴をするといった清潔ケアに主体的に参加することができました。

実習終了後のアンケートには、「看護師さんは目的、根拠、方法を詳しく説明してくれ、質問に丁寧に答えてくれた」、「看護師さんは自分が考えるように質問してくれた」、「さらに良い看護ができるようなアドバイスをもらった」、「臨地実習の間に復習することや調べることができてよかった」、「学んだことを実際に体験することで理解できた、技術の定着につながった」、「臨床に出ることで毎日の授業が楽しくなった」等の感想が記述され、実習のねらいが達成されたとと言えます。

実習施設の皆様からは多大なご協力をいただきました。結果として、「看護の魅力が伝わる」「現場につながる基礎となった」と評価していただきましたが、初めての实習で検討すべき課題も多くご指摘いただいています。次年度の実習がより効果的なものとなるよう各施設とともに検討を始めています。

機能看護学・基礎看護学領域 講師 すまが ありこ 駿河 絵理子

平成27年度 医療栄養学科卒業研究発表会

医療栄養学科では、昨年度から卒業研究の口頭発表会を開催しております。今年度は11月30日に行われました。意欲ある学生が、日頃熱心に研究に取り組んだ成果 25 演題について発表しました。参加者 4 年生 59 名、3 年生約 50 名 計約 109 名で、活発な討論が行われ、充実した発表会となりました。これらの卒業研究が学会発表につながったものについても紹介いたします。

卒業研究発表題目一覧

- **五百藏良研究室**
『自然界からの植物性乳酸菌の分離と発酵乳への応用』
『自然界からの野生酵母の分離と製パンへの応用』
- **碓井之雄研究室**
『診療所に従事する医療者による患者のサプリメント摂取に関する把握状況について』
『コラーゲンペプチド摂取による肌症状改善効果について』
『難消化性デキストリン含有食品の有効性について』
- **大道公秀研究室**
『調理前後の安定同位体比変動に関する研究』
『パツリンのGC/MS分析法の検討』
- **神田裕子先生**
『大豆イソフラボン代謝と女性の健康に関する研究』
- **北島幸枝研究室**
『カルニチン摂取を目指した透析食メニューの立案』
- **齋藤さな恵研究室**
『野菜摂取量増加を目的としたお弁当の検討ーその1ー』
『野菜摂取量増加を目的としたお弁当の検討ーその2ー』
『粉末タイプの高野豆腐を用いたレシピの検討』
『女子バスケットボール選手における食品の運動前摂取による効果の検討』
- **西念幸江研究室**
『くるみの活用方法に関する提案』
- **清水雅富研究室**
『各種脂肪酸摂取の違いによるマウス肝臓中の遺伝毒性への影響』
『ヒトDNMT遺伝子形質転換酵母のエピ変異感受性に関する研究』
- **鈴木礼子研究室**
『乳がん予防情報の認知度調査：食育推進全国大会』
『未就学児の秤量法による食事調査～卵アレルギーの有無とたんぱく質摂取量～』
- **森本修三研究室**
『大規模病院における適温給食の現状報告（第2報）』
- **細田明美研究室**
『自立高齢者の食事摂取状況と口腔機能状態との関連性』
- **三舟隆之研究室**
『古代における糖（飴）の復元』
『『延喜式』に見える古代漬物の復元について』
『古代の堅魚製品の復元』
- **渡部容子研究室**
『栄養教諭制度開始の意義－教育活動および児童生徒への影響－』
『チーム医療従事者の栄養学教育－医師・薬剤師・看護師・臨床検査技師・管理栄養士のカリキュラムと国家試験の検討より－』
(指導教員五十音順)

学会にて成果発表された卒業研究の紹介

- **EGEA CONFERENCE 2015 (鈴木研究室)**
平成27年6月3日～5日 ミラノ・イタリア
『Consumption of vegetables among children in Japan by socio-economic status』 齋藤俊春、平山綾華、久島早織
- **第25回体力・栄養・免疫学会 (大道研究室)**
平成27年8月22日 帝京科学大学 千住キャンパス
『リング及びブドウジュース中パツリン分析の現状と課題』 村田裕介、乳井雅美、植松香織、駒崎三佳、網島友莉乃、松浦直
- **第62回日本栄養改善学会 (鈴木研究室)**
平成27年9月24～26日 福岡：福岡国際会議場・福岡サンパレスホテル
『乳がん予防情報の認知度調査 ～食育推進全国大会（長野・神奈川・広島）～』 久島早織、今野聡大、平山綾華
『未就学児の秤量法による食事調査～卵アレルギーの有無とたんぱく質摂取量～』 平山綾華、久島早織
- **第11回日本給食経営管理学会学術総会 (森本研究室)**
平成27年11月28～29日 東京・日本女子大学目白キャンパス
『大規模病院における適温給食の現状報告（第2報）』 荒井瑠美、梅田実和
- **第7回 せたがや福祉区民学会大会 (鈴木研究室)**
平成27年12月19日 日本大学文理学部
『野菜摂取量の増加・和食の普及を目指した公衆栄養活動報告』 松丸みずほ、山崎茜
(学会開催日順、学生名と研究室名のみ表示、下線：卒業生名)

学生献立 | 東京都福祉保健局 HP に紹介

東京都食生活改善普及運動 平成27年度 「500kcal山野菜たっぷりバランスランチメニュー」企画の一環として、本学3年生の作成献立『エネルギー控えめ&野菜たっぷりの鱈の甘酢あんかけ～和定食』が、東京都福祉保健局HPに紹介されています。

http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kensui/ei_syo/yasai/500kcal.html

また、都庁1階アートワーク台座にて、平成27年9月に写真紹介されました。



平成27年度 医療情報ゼミ 発表会

医療情報学科では平成27年12月21日、3年次生による医療情報ゼミの発表会を実施しました。今年度は、初めての試みとして学内ではなく、国立オリンピック記念 青少年総合センターにて執り行いました。普段と異なる環境のもと、7ゼミによる取り組み成果が報告され、ゼミの受講生、本学科2年次生、学内関係者に加え、病院実習・企業実習先の関係者の皆様にもご来場いただき、活発な質疑応答が行われました。卒業研究は選択科目のため、一部の学生にはなりますが、このゼミ発表の成果を活かして、今後も研究に取り組んでいてもらいたいと思います。

発表題目一覧

●津村ゼミ

「e-learningシステムedenを使用した電子教材の開発」

●比江島ゼミ

「Counter Factual Model で比べろ!」

「Observational Study で眺めろ!」

「Bias 現る!」

「Randomized Controlled Trial 最強!」

●瀬戸ゼミ

「音声認識システムを用いた外来診察の改善」

「地域医療支援病院におけるホームページの改善」

「自治体等が提供するAED マップの現状と課題」

●駒崎ゼミ

「医療安全を考える参加型検討会の実践～ドラマメソッドとワークショップによる～」

●深澤ゼミ

「病院受付システムの開発」

「診療予約システムの開発」

「処方箋管理システムの開発」

「診療録貸出管理データベース・システム」

「ベッド管理システムの開発」

「病床管理システムの開発」

「病院給食管理システムの開発」

「退院サマリー・データベースの作成」

「医療従事者勤怠管理データベースの開発」

「医療機器管理システムの開発」

「診療情報管理士試験対策アプリの開発」

●山下ゼミ

「バイタル・活動量記録システムの開発」

「医介連携のための口腔ケア記録共有アプリケーションの開発」

「うつ病予防のための自己対話型支援アプリ」

「ディスレクシアの子どものための眼球運動アプリケーションの開発」

「デジタルお薬手帳による薬剤管理アプリケーション」

「高齢者の認知症予防支援アプリケーション」

「肥満改善のためのアプリケーション」

「生活習慣病予防のためのウォーキング支援アプリの開発」

「痩せ型志向女性のための食生活管理アプリケーションの開発」

●今泉ゼミ

「福祉マークが確認できるアプリケーション」

「動体視力の簡易検査を目的としたアプリケーションの開発」

「乗り過ごし回避用の強制通知アプリ」

「野菜価格表示アプリケーション〈ベジ★ぷらっ!〉」

「漢字の知識向上を目的としたアプリケーションの開発」

「モグラ叩きを使った記憶ゲーム」

「ストレスを抱える人に癒しを提供するアプリの検討」

「音声読上げ・入力機能を用いたコミュニケーション支援アプリ」

「運転スタイルの個人特性評価のアプリケーション」

「発達障害児向けのスケジュール提示アプリ」

「白血球を学ぶことを目的としたアプリケーション開発」

(発表順)



発表風景



質疑応答風景

立川キャンパスの紹介

2014年4月に東が丘・立川看護学部と改名され、災害看護コース100名が入学してから、早いもので2年が経ちました。2016年度からは、3年生は立川に移動となり、新しいキャンパスでの講義や演習が始まります。そこで今回は、立川キャンパスの概要や周りの環境について少しご紹介したいと思います。

立川キャンパスは、「国立病院機構 災害医療センター」に隣接しており、来年1年間は、現在ある「昭和の森看護学校」に同居させていただく形になります。

災害医療センターは、みなさまご承知のように、我が国の災害医療の中心であり、全国で災害が発生した時には、真っ先に駆けつけて、現場で活躍するDMAT（災害派遣医療チーム）の本部でもあります。普段は455床ですが、災害時には900床近くまでベッドを増やせるような特殊な施設になっています。このような災害医療の最前線の現場で活躍する人々と一緒に実習などができるということは、学生にとって、他では得ることのできない経験となるでしょう。

立川キャンパスは、講義棟と研究棟の2つの建物で構成される予定です。講義棟は、元々ガラス張りの図書館があるなど建物のデザインもお洒落で、学内の各所にラウンジ・スペースなどがあつたり、屋上にテニスコートがあつたりするので、移動を楽しみにしている学生もいるようです。一方、研究棟は元々学生寮だった建物を改装するもので、各領域の研究室や学生食堂、ロッカー室などを設置する予定です。

さて周りの環境に目を向けてみると、新宿から35分ですし、駅前にはルミネや伊勢丹、高島屋などが立ち並んでいます。立川キャンパスの隣にはIKEAができていますし、さらに昨年末には、すぐ隣の駅に約250もの店舗が入る「ららぽーと立川立飛」がオープンし

ており、思っていたより都会だということに驚いています。

また一方では、すぐ隣に昭和記念公園がありますので、自然あふれる環境ともいえます。昭和記念公園は、日本を代表する国営公園で、東京ドーム39倍の広さを誇り、四季折々の花々が咲き乱れるだけでなく、サイクリングコースやテニスコート、プール、バーベキューガーデン、イベント広場等の施設も充実しています。また、桜の名所としても有名で、春になると1500本もの桜が咲き誇るそうです。お花見のついでにでも、ぜひ立川キャンパスまで一度お越しください。

東が丘・立川看護学部 准教授 高木 晴良 たかき はるよし



昭和記念公園の桜
(公園事務局提供)



立川キャンパス校舎

国家試験に向けて頑張っています！！ 白いダルマに全員合格を祈願して

本学部は、平成27年度までに1、2期生が修業し、看護師国家試験の結果は全国の平均合格率を上回りましたが、本学が目標としている全員合格は達成することができませんでした。

現在、臨床看護学コース3期生の看護師国家試験100%合格を目指し、国家試験対策（以下「国試対策」という）に取り組んでいます。災害看護学コースの学生に対しても、平成27年度から2年生を対象に国試対策をスタートしており、2年後の看護師国家試験全員合格を目指しています。

国試対策は、学部の委員会の1つである国試対策委員会、学生の国試対策委員、教員によって行われています。国試対策委員会は、学生の国試対策委員と連携し、2～4年生を対象とした国試対策の年間計画の立案・実施・評価を行っています。具体的には、学年ごとの国試ガイダンスの実施、業者模擬試験の計画と結果の分析（今年度4年生は6回実施）、模擬試験結果がふるわない学生に対する学習強化対策、教員による補講の計画と実施等を行っています。

臨床看護学コースは、看護基礎学など8つの領域で構成されており、各領域で学生10～20名を担当し、3年生後期から英語論文クリティーク、卒業研究、看護学統合実習の科目の展開と同時に国試対策、就職支援も行っています。国試対策に関しては、各領域で計画を立て、個々の学生の学習状況や学習スタイルに合わせた個別指導を継続的に実施しています。このように、国試対策を委員会と領域が連携して行っているため、全教員が国試対策に係わり、学生に対して早い時期から具体的な指導が可能となります。

また、保護者の皆様にも国試対策への支援を文書でお願いしてい

ます。学生が国家試験の学習に集中できるためのアルバイトの調整等経済的な支援、学習環境の整備、励まし・見守りなどの精神的な支援は、学生にとって重要ですので、かさねて保護者の皆さまのご協力をお願いいたします。

本学部では昨年11月末、草間朋子副学長、山西文子学部長からナースをイメージした白く大きな合格祈願のダルマが学生に贈呈されました。学生が目入れをし、名前を書いた祈願札を一人ずつダルマに貼りました。看護師の国家試験合格は、就職の必須条件になります。願いが叶い、看護師としての第一歩が踏み出せるよう、平成28年2月14日の受験日に向け、一丸となって国試対策に取り組んでいきましょう！

また、1～3年生の皆さんには、国家試験は在校生の最終目標ではありません。大学修了時の大事な通過点の1つです。常日頃の学習成果を公的に確認し、看護師としてのスタートを切る出発点です。1年次からはじまるカリキュラムを4年間を通して順序に沿って理解していくことが大切です。そのことをしっかりと認識し、学習に励んでくださるよう期待しています。（平成28年1月20日記）

東が丘・立川看護学部 国家試験対策委員会 准教授 岩本 郁子 いわたし いくこ



ダルマの目入れ

院生の声



私は感染対策関連製品を扱うメーカーの学術部に所属し、マーケティングも兼務しながら、当大学院の博士課程（感染制御学）に在籍しています。間もなく卒業を迎えようとしています。3年間は本当にあっという間でした。もともと出張が多い職業でありながら、生きた細胞や微生物を使用した実験を研究テーマ（ウイルスに対する消毒薬の効果）としたため、仕事のスケジュールと実験の時間確保

の調整が大変でした。実験条件や手技の問題により、条件の見直しや実験のやり直しが続き、先が見えない時期もありました。しかし、時間的な拘束が厳しい中、ひとつのテーマに集中し、深奥を極めることの苛烈さを学び、また、このような研究の積み重ねが、エビデンス成立の根幹をなす事実を実感できたことは、一研究者として、良い経験となりました。このような機会を与えていただいた会社の社長を始めとし、実務的な協力をいただいた先生方や関係者の皆様には深く感謝しています。

現在は、博士論文の発表が終了したところですが、これまで得たデータの科学的信憑性

をより確かにするため、今後、実験例数を増やし、ひとつの方向からの検証だけではなく、より多面的思考からの検討も続けていければと考えています。大学院で学んだ基礎的な研究を、実社会でより役に立てる研究へと発展させることを目標に、討究し続けていくことが、卒業後の目標です。

また、大学院での研究の経験を活かし、現在所属するメーカーの研究部門と販売部門の意見調整や組織としての一元論の提案、さらに医療従事者の方々への情報提供などを通じて会社に貢献したいと思っています。

医療保健学研究科 博士課程3年
感染制御学領域 吉田 葉子



「自分の考えを相手に伝える」、何気ないものだと考えていましたが、とても難しいことだと痛感しています。看護は多くの場面で「伝える」力が必要とされる職種だと考えています。例えば病院等での日々の申し送りでは、対象者の状況や自分自身が実践したケアを伝えます。またある時は、対象者やそのご家族に治療やケアの内容をわかりやすく伝える必要があります。この際、自分が思う「感想」を伝えるのみでは、多くの場合、相手に理解や納得してもらうことは難しくなります。ま

た、自分の考えを押し付ける危険性が生じる可能性もあります。このことを避けるためにも、自分がなぜそう思うのか、論拠をもって伝えることが必要となります。しかし実際は、つい思いが先行してしまうことが多々あるのが現状です。

私が大学院に進学した理由の一つに、伝える力を養うことがあります。自分が何を考え、何を実践しようとしているのか、論拠に基づいて伝えられる看護師になりたいと考え、大学院に進学しました。実際に、大学院では講義でも研究でも、先生方から「自分はどうか考えているのか」問うて頂く日々が続いています。うまく伝えられず、伝えるための材料も少なく、苦しい時も多いですが、ひとつひとつ言葉に出来るが増えてきている

ことを実感しています。また、看護についての「考え」を伝え合えることに、看護の面白さを感じている日々です。

現在私は、先生方からのご指導のもと、認知症を有する高齢者に関する研究を行っています。その人の生きてきた軌跡である「記憶」が徐々に不確かになっていく病態を持つ認知症は、人生の完熟期にある高齢者にとって、生きる上での大きな不安になり得る可能性があります。たとえ認知症を有しても、その人が安心して暮らしていくことを支えたい、という信念を育みながら、伝える力を醸成しつつ、これからの研究に取り組んでいきたいと考えています。

医療保健学研究科 修士課程1年
看護実践開発学領域 星野 彰太



“大学院に行きたい”。私の中にこの気持ちがあったのは本当です。しかしそれよりも、“行かずにはいられない”という方が正しいかもしれません。なぜこのようなことを申し上げるかといいますと、職場で毎日疑問に遭遇するからです。私は管理栄養士として病院に勤務し、働く傍ら本学で医療栄養学を専攻していますが、この“医療栄養”という分野は新しく、知りたいと思うことが多くあります。仕事のなかで、患者さん一人ひとりについて栄養状態を確認し、栄養管理の計画を立てて実施していくのですが、一人として同じように

は行きません。それは給食を提供する立場であったとしても同じように思います。食品の持つ栄養素は、特に生鮮食品においては“全く同じ”ものは存在しません。調理方法や他の栄養素との関連によっても影響を受けやすく、最終的な吸収状態は異なってきます。これが、先に申し上げたような、身体状況、代謝状況、生活習慣がまるで異なる人に入っていくのですから大変です。しかし確実に言えることは、“人は生まれる前から生涯を終えるまで栄養と関わっている”ということです。話を聞くと、自らに留まらず“自らの栄養は後世にまで影響を及ぼす”ことさえあるのです。未だわからない多くの真実。そのたとえばわずかなことでも解明することができたら、きっと多くの人を救うことができるかもしれない。また、より長く健康でいられるかもし

れない。そう考えたら、大学院の門をたたかざるにはいられませんでした。

私は受験に際し、多くの先生方に相談し、親身なご助言をいただき本学の受験を決心しました。決め手は、素晴らしい先生方との距離が非常に近く、深く学べること、また仲間との助け合いや励まし合いも密であること、そしてスタッフのサポートがとても丁寧であることです。自分一人では、たとえ大学院に入学しても学びは浅くなります。私は入学前に自らが想像していた以上に深く学べていることに対し、大きな驚きと感謝を心に感じています。一人でも多くの人と学びを分かち合い、未来に繋げていきたい。そう願いながら、これからも励んでいきたいと思っています。

医療保健学研究科 修士課程1年
医療栄養学領域 高山 はるか

「改正・保健師助産師看護師法」に基づく特定行為研修がスタート

看護学研究科看護学専攻（大学院修士課程）は、平成27年8月5日塩崎恭久厚生労働大臣から「特定行為研修指定研修機関指定証」を受け、平成27年10月1日から特定行為21区分38特定行為全てに係る研修を実施できる指定研修機関となりました。

本大学院での教育は平成22年からスタートし、既に80名の研修修了者を社会に送り出しております。修了生に認定証を渡すために、昨年4月から、厚生労働省からのヒアリング、指導、施設調査など繰り返し行われ、総合看護学領域の教員、大学院担当の事務官が作成した関係資料は、分厚いファイルが何冊にもなりました。修了生80名に昨年10月5日に「特定行為研修修了証」を渡すことができました。その結果を、10月末日に厚生労働省へ修了者名簿とともに報告しました。



修了証を受けた大学院1期生 松村美絵さん

修了証を待ち望んでいた1期生からは感無量であるとの声も聞かれ、本コースを開設し、多くの教授をはじめ国立病院機構東京医療センター、災害医療センター、東京病院の臨床教授等関係者の皆様の支援で実施してきた手ごたえを実感しました。修了証を受け取った修了生がプライドをもってNP（診療看護師）として取り組み、医療の質の向上を目指して確実に実績を残しつつあることをうれしく思っております。

修了証を待ち望んで

80名の修了生は大学院修了後、各施設の協力の下、「臨床研修として、指導医師の直接的な指導を受けながら、1年間以上の多くの学びと体験を重ねております。急性期病院の外科系病棟や救命救急センターなどのクリティカルな患者さんが多くいる部署に配置された修了生達は、高度な判断力と実践力をもって初期医療に対応し、相談しやすい相手として患者さんはもちろんのこと看護師からも頼られ、患者さんの立場にたった詳しい説明行為や不安の解消にも役立ち、将にチーム医療のキーパーソンとしてしっかり活躍しております。学部学生からも将来の自分たちのキャリアの一つとして認識されつつあることも、影響が及んでいる証としてうれしく思っております。

患者さんはもとより、医師、看護師、各職種から喜ばれ、中核的な存在の診療看護師が社会的にも認知されてきつつあり、さらなる成長と「改正・保健師助産師看護師法」の制度定着のために大学としては、今後もしっかり支えていく覚悟しております。

看護学研究科 教授 山西 文子

看護学研究科 教授 山西 文子

原発事故後の福島を見学して

2015年8月5日(水)、大学院の授業の一環として福島県立医科大学を見学する機会を持つことができた。その日は、気温が40度に達しようとする猛暑で、「中通りの名称を持つ福島市は盆地ならではの暑さであった。東京電力福島第一原子力発電所の事故から5年目を迎え、福島市の街並みは穏やかな日常の風景であった。福島駅からバスに30分程揺られ、福島県立医科大学に到着した。今回の見学の目的は、①県民健康調査の概要と現状、②甲状腺検査の実際、および③事故当時の放射線災害対応看護師の役割の理解と施設内の見学であった。

福島県は、2011年の原発事故による放射線の影響を踏まえ、2013年から県民の外部被ばくの評価と健康状態を把握し、将来にわたる県民の健康増進のために「県民健康調査」を実施している(30年間)。「県民健康調査」では、「基本調査」として全県民を対象に外部被ばく線量の推計、「詳細調査」として、①健康診査、②甲状腺検査、③こころの健康度・生活習慣に関する調査、④妊産婦に関する調査が行われている。

外部被ばくの線量評価結果は、約99.8%が5mSv^(注)未満、最高値が25mSvであり(放射線業務従事者を除く)、放射線による健康影響が発生する可能性は考えにくいということであった。国が指定した避難区域等の住民の方々を対象とした健康診査の結果は、肥満(BMI)、耐糖能(HbA1c)、肝機能検査(ALT)、高血圧(拡張期血圧)など、いわゆる生活習慣病関連の検査異常の割合が増加しているということであった。

2011年に避難区域に指定された住民の方々は避難を余儀なくされたが、宮城県、岩手県などの地震・津波災害と違い、46都道府県1,200市町村に及ぶ広域避難であった。また、3世代以上の大家族が避難生活の長期化に伴い、子供の学校の選択、就労、家族の介護等により家族離散の状況が進んでいた。そして、帰宅困難区域、居住制限区域など避難が長期化して将来の見通しが立てられない、農業等に従事されていた方が多く再就労が難しいという状況が分かった。外部被ばく線量は健康影響があるとは考えにくいという結果であっても、避難の長期化、広域化、家族離散、就労困難などによりコミュニティが破壊され、生活基盤を喪失し、生活環境の変化が住民の方々の健康状態に大きな影響を及ぼしているという原子力災害による負の連鎖が見えてきた。

今回の見学を通して学んだことは、放射線被ばくという特殊な状況下ではあるが、地域住民の健康問題を考える際、漠然とした怖れや顕在化した健康障害のみを問題としてとらえるのではなく、その健康障害の原因となっている背景を客観的にとらえ、看護師として支援していくことの重要性である。医療の領域では日常的に放射線や放射性物質が利用されていることを考えると、私たち看護職は患者さんたちに安心して放射線診療を受けてもらうための適切な対応ができるように、放射線の知識をしっかりと理解する必要があることを改めて認識した。

看護学研究科 修士課程2年 看護科学コース 福田 淑江

(注) Sv(シーベルト)は、放射線が「人間」に当たった際にどのような健康影響があるかを評価するための値である。

平成28年度オープンキャンパス等日程

平成29年度の学生募集に向けて、本学での学びや教育力を伝える下記の各種イベントを予定しています。
多数のご参加をお待ちしております。

日 程	区 分	備 考
平成28年6月10日(金)	高校教員対象大学説明会 (五反田)	
平成28年6月18日(土)	進学ガイダンス (五反田)	
平成28年7月17日(日)	オープンキャンパス (世田谷)	
平成28年7月23日(土)	助産学専攻科 説明会	専攻科企画
平成28年7月31日(日)	オープンキャンパス (国立病院機構キャンパス)	
平成28年8月13日(土) 平成28年8月14日(日)	オープンキャンパス (五反田)	
平成28年8月20日(土)	医療栄養学科 学科体験見学会 (世田谷)	学科企画
平成28年8月21日(日)	東が丘・立川看護学部見学会 (国立病院機構立川キャンパス)	学部企画
平成28年8月6日(土) 平成28年8月27日(土)	医療情報学科 見学会 (世田谷)	学科企画
平成28年10月1日(土)	入試説明会 (世田谷)	主として推薦入試受験者に向けた企画
平成28年10月16日(日)	東が丘・立川看護学部見学会 (国立病院機構キャンパス)	学部企画
平成28年11月5日(土) 平成28年11月6日(日)	医愛祭〈入試相談会〉(世田谷)	
平成28年11月19日(土)	入試説明会 (五反田) 一般入試教科別対策講座等 《英語・数学・化学・生物・国語》	一般入試受験者を主対象にした企画 (過去問題分析)
平成29年3月18日(土)	進学ガイダンス (五反田)	新高校3年生・2年生を対象にした企画

(入試広報部)

国際交流

International Exchange

国際交流委員会主催の全学合同海外研修は、3月7日～14日の予定で実施されます。現地実習に先駆けて、昨秋より月1回程度の事前学習会を開催していますが、去る2月13日に行われた第4回目の事前学習会では、この研修が開始されて以降初めて、インターネットを使ってハワイ大学スタッフとのライブセッションを実施しました。

学生たちは第3回事前学習会で行ったグループワークを英語で伝える準備を行い、そのセッションでは、全6グループが、それぞれのグループワークを英語で紹介しました。ハワイ大学側は、ローリー・ウォングシミュレーションセンター長およびそのスタッフ3名が参加して、それぞれにメッセージを送ってくれました。初めての試みでしたが、双方通行のテレビ会議はとてもスムーズにうまく進みました。事前に、ハワイ大学のスタッフと顔を合わせながらコミュニケーションをとることができたことは、学生の研修参加への



グループワークを英語で伝える練習をする学生たち

モチベーションを大きく向上させるのに役立ちました。

このライブセッション後には、医療栄養学科、看護学科の学生たちが事前にまとめた糖尿病患者の症状や治療法についてのプレゼンを行い、現地でのシミュレーションで使うシナリオ内容に関する学習を全員で共有しました。

2月22日には、医療情報学科主催、国際交流センターおよびアクティブラーニング実施委員会共催の国際的ワークショップ「シミュレーション教育ワークショップ」が、世田谷キャンパスM101教室で実施されました。

講師には、医療におけるシミュレーション教育で世界的に著名なハワイ大学医学部教授で、シミュレーション研究センター SimTiki のセンター長をつとめるベンジャミン・バーグ氏をお迎えしました。第1部では、バーグ氏に「シミュレーション教育とインストラクションデザイン」というテーマでご講演いただき、第2部では、医療情報学科の瀬戸講師が、同学科学生を対象としたシミュレーション授業のデモンストレーションを行いました。

医療情報学科の教員を中心に20数名が出席して、シミュレーションを使った教育設計についての講義に熱心に聴き入っていました。医学書院の「週刊医学界新聞」紙等の編集者も取材に入り、このワークショップの様子は同紙で後日紹介される予定です。



事前学習でシムマンについて学ぶ学生たち



学生がハワイ大学教員たちとライブでテレビ会議



バーグ教授による講義風景

トピックス Topics

大学を語る会の開催

平成27年10月21日(水)17時30分から五反田キャンパスにおいて、平成27年度の「東京医療保健大学を語る会」を実施しました。本年度は本学の開学10周年に当たることから、今後10年に向けて建学の精神をより一層活かした大学教育の質向上を図るとともに、中期目標・計画に基づき教員の資質向上及び教育力の向上を図ることを目的に「学生の能動的学修を促すための取組みについて」をテーマとして、学部・研究科の各組織の教員による発表の後、活発な意見交換が行われました。

地域貢献活動

- 平成27年度の公開講座を下記のとおり実施しました。
 - ①平成27年6月6日(土)
「スマホでできる！健康管理」(品川区との共催)
 - ②平成27年10月18日(日)
「認知症ケア 発症と進行の
予防策として家族にできること」(世田谷区との共催)
 - ③平成27年11月14日(土)
「逆境を乗り越える力、折れない心を育てる
－レジリエンスとは何か－」(品川区との共催)
- 学生ボランティア食育・地域医療サポートチームの活動
平成27年11月14日(土)及び11月15日(日)の2日間、第8回東京都食育フェアが開催され、ブースを出展しました。また、本学医療栄養学科の3年次生2名、1年次生32名、教員2名がキャンサーネットジャパンと連携し、小児がん・思春期世代のがん患者支援(AYA世代がん支援)のために募金活動を行うなど、地域社会への貢献とともに、学生自らも能動的な参加型の学びを深める貴重な経験となりました。

感染制御学企業人支援実践講座を開講

企業等で感染制御に関する業務に携わっている方々を対象に、専門的知識をさらに深めていただき、併せて、感染制御学に関する最新の情報や病院現場の取組み状況などを知っていただくため、平成27年度は7名の受講者を迎えて、5月16日～8月1日までの各土曜日の全10回にわたり、感染制御学企業人支援実践講座を開講しました。

この間、授業及び4病院の施設見学を実施するとともに最終レポートにおいても全員が良好な成績を修めて、8月29日(土)には修了式を行いました。

防災(消防)避難訓練の実施

本学の災害防災対策規程に基づき、平成27年度の防災(消防)避難訓練を教職員・学生の参加を得て、次のとおり実施しました。

- ・11月27日(金)五反田キャンパス (119名参加)
 - ・12月9日(水)世田谷キャンパス (147名参加)
 - ・12月4日(金)国立病院機構キャンパス(126名参加)及び
12月7日(月)国立病院機構キャンパス (103名参加)
- (注)国立病院機構キャンパスでの訓練は、学科のコース別に2回実施しております。



Editor's note

編集後記

本号においては、昨年末に実施した開学10周年記念祝賀会に関して写真とルポ風の記事、また祝賀会の参会者の方々に記念品としてお配りした開学10周年誌について紹介しました。開学後10年にして周年誌を発刊する例はそれほど多くないと思います。今回は大学上層部の判断で発刊のゴー・サインをいただけました。しかし、例え10年といえどもその歩みを正確な記録として残す作業は容易ではなく、特に保存されている写真などの映像資料が少ないことが悩みの種でした。また、編集作業の途中で体制が変更になった影響もあり、当初意図した構想がどの程度実現できたのか分かりません。ただ、一つ言えることは、この10周年誌が今後の大学の未来へ

の道しるべになるとともに資料的価値として貴重だということでしょう。デジタル時代の流れに乗り、電子ブック(CD-ROM版)として発刊しました。この場をお借りして編集・制作にご協力いただいた多くの皆さんに深く感謝を申し上げます。

その他の記事では、本年4月に開設される立川キャンパスの紹介記事あるいは大学院生の寄稿から、大学院で学ぶことの各々の思いや東日本大震災で被災した原子力発電所のある地域の今を見学した際の記事などを掲載しました。ご一読ください。